

東京専門学校で大久保余所五郎(湖州)、中桐確太郎、田村三治等と識る。

東京専門学校英語政治科一年に転入。

明治二十四年(二十一年)

教師植村正久によつて洗礼を受く。

東京英語専門学校英語政治科改革を要求してストライキに入る。

大久保湖州と共に専門学校退学。

明治二十五年(二十二年)

ワーズワース詩集を手に入れた。

明治二十六年(二十三年)

「欺かざるの記」起草。

中桐確太郎轉校の祝職先「高島民報社」とことわる。

徳富蘇峯の紹介と矢野龍溪の推薦で、鶴谷学館教頭となる。

明治二十七年(二十四年)

印刷業を企画し、二月六日まず弟收二と柳井町

に姉御せしめ、父母その他と相談させた。

三月十八日独歩も帰省し懇談した。資金調はず、二十八日再び佐伯に帰った。

四月十日徳富蘇峯より、印刷所融資困難との返事が来る。

七月末、鶴谷学館退職。

上京途中、考根所に帰省していた大久保湖州宅訪問。

明治二十八年(二十五年)

大久保湖州雑誌「精神」を編集、史伝、史論家として知らる。独歩も同誌上に屢々寄稿した。

明治三十三年(三十年)

大久保湖州病歿。

明治四十一年(三十八年)

独歩の病勢悪化。中桐確太郎見舞のため訪問。

六月二十三日茅ヶ崎南湖院に歿す。

東京青山墓地に葬る。

(この項終り)

集會記録

大内・龍護寺を歩いて——鶴岡地区集會の記

日時 二月二十日 午後二時(虎す大内の梅林へ)
出席者 宇田頼朝、高木会長、若杉、古藤田、清田、吉良、拜柴、五十山、高司良忠氏、主良マツ氏、益富頼南、小野、

大内の梅はやつと五人分咲。今年はやかなか開かぬ。旧梅林はすつかり枯れ返して今は草に生つてゐるが、すつ手前の堂座敷のあたりが賑やかに咲いていた。善教寺の跡に上る。小さな丘であるが、こゝ下の竹林が梅林、梅林一帯が、かつての善教寺の跡と伝えられ、小さな石塔が立っている。丘面は「南無阿彌陀佛」とある。善教寺の跡は古市にもある。察するに古市からこゝへ、そして現在の市内馬場区に移つたためであらう。それ以前寛永十九年(一六四二年)のこと、石塔の寛政五年(一七二三年)後にある。因に記録によると、古市の善教寺と移して云々であるが、こゝ大内は昔は古市村に属していたのである。

それから一行は佐脇繁治夫の御案内を得て王治推定の丘に上り、古い五輪塔などを見て龍護寺に向い、一段高い丘の墓地に昔の龍護寺跡を推定、こゝにも古塔が数の中ば埋もつてゐた。
今日の目指すと、それは内海の堤の横、各柱の墓は疎林の中におつた。朝し

い古の墓石、その多くは五輪塔である。持参の鎌で、その字をきり取、倒れおは起し、目星いとこを握つ左が目星、佐伯惟教の墓石らしいものは標し、出せやうかた。
失望はしない。必ずどこかに埋もつてゐる筈である。今後の課題である。
それから龍護寺に参拜、惟教父子の位牌、佐伯氏墓、代々位牌などを拝し、境内にある佐伯惟真の墓を見る。この墓は其の安から、或る年子から惟教の子、惟真のまづまぢかいない。だから日向町寺に葬死した父の惟教の墓が必ずある——というわけである。
さよへと疲れたので、酒屋にお立ち寄り、先般御母方面に伺つた際、佐藤氏の御意と高木会長より披露、忍び難かたが、羽柴から大高神所家の古文書を提示、一書共三十通余に及ぶ古文書の讀解やその内容研習、そしてその一連の古文書のもつ意義と、及んば考えていふたい。

地豆研會会の一のやり方で、今年はそのようになり、各地で企画されることを望む。(用筆)